

イワントモリ第二回公演「明日のハナコ」
2024年9月29日(日)
@東温アートヴィレッジセンター シアターNEST

ポストパフォーマンストーク

登壇者：須貝英（演出）、岩淵敏司（俳優）、森田祐吏（俳優）

ゲスト：玉村徹さん（元福井農林高校演劇部顧問）

※以下敬称略

須貝 今日ではよろしくお願ひします。
実は、開演前に楽屋で少し玉村先生とお話をさせていただきまして、その時点で相当おもしろい話をたくさん聞かせていただきました。
ぜひそのへんの話をごんごんお聞きしたいと思っております。

森田 僕ちよっといひですか？玉村さんの、今日ご覧になつた率直な感想をぜひお聞かせいただけると嬉しいです。

玉村 玉村です。今日はありがとうございます。
そりやもう、最初、髭面のひとが出てくるので、どうしようと思つてたんですけど・・・
実は脚本になかつたんですよ、リップを塗るシーンとか、服を着替えるシーンとかです。あー無駄に時間をかけているなあと思ひましたね（笑）。そのへんは脚本には全くないんですけど、そういう「手続き」がキチツとされていひたので、本当にだんだんと「あ、女子高生なんだよな！」と思ふようになりました。本当にいい劇でした。ありがとうございます。

森田 こちらこそありがとうございます。
僕らもおっさん二人なので、女子高生をどう演じるんだというところで最初つまづいたというか、どうしようかということになつたんですけど・・・

——女子高生のパワー

岩淵 でも、女子高生だから良かったというか、わりと直前に芝居がガラツと変わったじゃないですか？

須貝 変わりましたね。

岩渕 やっぱ女子高生のパワーってこの芝居に絶対に必要なんだって。わりとそれまで、トーンが低めの芝居をしてたんですよね。

須貝 ゲネプロっていう本番と同じ手順で進めるリハーサルがあるんですけど、ゲネプロの後に、そんな話になって、「パワーで押しいきましょうよ」みたいな話をしたら、芝居が一気に変わって、そこからもう全然性格の違う作品になって・・・「演劇すごっ！」ってなりましたね。

岩渕 それまでの時間は何だったんだって（笑）

森田 そんなことない（笑）

須貝 それまでの時間の積み重ねがあったから、そこに至ったってということですからね。決してその場の思いつきで生まれたのではなくて、我々の積み重ねたものがやっぱりそこを要求するよね、となったのかなと思います。岩渕さんも玉村さんに聞きたいことがありますか？

岩渕 はい。
森田くんが上演許可を玉村さんから取ってくれたんですけど、その後のやり取りは僕が担当になっていって、玉村さんとメールのやり取りをさせていただいたんですけど・・・玉村さんのメールはとにかく長いんです（笑）
本当に長文のメールなので、腹を据えないと返信できないというか。「わかりました」の一言では失礼なんじゃないかと思って、スマホじゃなくて、ちゃんとパソコンを開いていつも返信をしていたのですが・・・なんでメールが長いんですか？

森田 そういう質問？（笑）

——思い入れのある作品、実際的女子高生たち

玉村 僕の性格だと思うんですけど、上演してくださるというのはめっちゃ嬉しいので、めっちゃめっちゃ書いてしまうのと、やっぱり思い入れのある劇だったので、僕はこんな風に思っているんだよー！っていうのを一方的に書いてしまっていたんだと思うんですね。

岩淵 でも逆にすごく短いメールの時もあるじゃないですか。とても不安になりました。嫌われたのかと思って（笑）

玉村 いやそれは反省があつて。
メールが長くてヒかれるなって思うから、たまに短くなっちゃうんです。

須貝 お互いに探りあつてたんですね（笑）

森田 文字にすると難しいですもんね（笑）

須貝 僕からも聞きたいことがたくさんあるんですが・・・
これは実際に女子高生お二人が演じられたということなんですが、どうやってこの劇やったの？というのがあつて。単純にものすごく台詞量があるし、僕らがものすごく苦しんだのは、場面の切り換えがとにかく多いからどうやっていたんだろうとか。あと、作品をつくる時に部員の皆さんが例えば一緒にリサーチしたりとか、部員の皆さんがこんなシーンを入れたいとかなど、製作段階であつたりしたのでしょうか。気になっていたのでお話を聞かせていただきたいです。

玉村 はい。この話を一番最初に考えたのは、この作品にもありますが、2021年の6月に美浜原発が再稼働したというのが、結構ショックで。じゃあそれを劇にしようよ、みたいな話はあつたんです。それで書き始めて、子どもたちにもこんな事があるんだよと話をして行って、色々とりサーチをしながらまとめていきました。福井県の演劇の大会が9月なんですね。それでその時の演劇部には役者が5人くらいと、スタッフが3人くらいいて。役者5人芝居で、女の子が二人、男子が3人でやっていたんですけど、8月のお盆過ぎくらいに男子3人がやめちゃいまして。

3人 えー！

玉村 「部活やめまーす！」ってやめていっちゃって。でも男子のパワーって大きいので、困ってしまって、どうする？大会辞退する？それとも二人芝居でやってみる？と訊いてみたら残りの女子が「二人芝居でやる」と言つたんです。でも5人芝居の部分で二人に集約するので、すごい大変で（笑）

須貝 いやもう、聞くだけで、やりたくないと思つました、その作業（笑）

玉村 ハナコの旦那の漁師のお父さんとかも男子がしていたんですよ。

須貝 そうですよ、そうなりますよね。

玉村 全部5人で分けて配役していたんですけど、人数が減ってしまったので、二人に集約されていくわけで。そうすると転換が早くなってしまって、そうするとリアルな舞台装置は作れないよね、転換も二人じゃできないし。じゃあ部室の中で劇を紹介しているっていう体（てい）でやろうよ、と。そうしたら装置も部室にある適当な材木持ってくればいいのかという話をしていきながら、形になっていきました。今回はすごく立派なセットがあるんですね。

須貝 でもこれは、段ボールばかりなんですけどね（笑）

玉村 うちも段ボールはありました。角材もありました。箱馬は一個か二個あって、終わりです（笑）だからすごくしょぼくなってしまったのは確かにあるんですけどね。

岩淵 最後の石碑はどうやってたんですか？

玉村 段ボールですね。段ボールにマジックで「ここあぶない」と書いて（笑）ほんとに子どもたちには負担の大きかった劇だったろうなと思います。

須貝 ということは、実際の上演も、部室の中で場面転換を繰り返す作品にしたということですよ。すごいなー。

玉村 いやでもその分、ギュツとお話が圧縮されて、かえっておもしろくなったんじゃないの？って自分たちでは思っていたし、なんとか上演はできたんでよかったなと思いました。

岩淵 生徒さんから二人芝居になっちゃったことで不満は出ませんでしたか？

須貝 そう、男子生徒に対してね。

森田 そうですよ、お芝居に対してというよりは、やめた三人に対してね。

岩淵 なんでやめちゃったんですかね？

玉村 それはね、勉強が理由だったんです。それともうひとつ「僕、声優になります！」って突然養成所行きますって言った子がいてね。でもまあそれは多分、高校演劇の世界ではよくある話というか、しばしばやめていきます。大体は大会直前でやめたり、大会が終わってからやめたり。

岩淵 それを束ねる先生も大変ですね。

玉村 でもそんなことがあると、かえって結束したり、盛り上がったりしてくれるので。多分いい劇の裏側には、ものすごい試練とか苦難がきつとあるんじゃないかなって思っています。

——劇中のハナコのシーンは、ほんとの話

須貝 ハナコというひとのモデルは、玉村さんのお母さまなんですか？

玉村 ハナコのシーンは、実際の話でないと嘘が入ってしまうと思ったので、本で読んだとかではなくてほんとの話なんです。うちの実家が地震で潰れて、その時のおかん（母）が中学生で、今は93歳で生きています。そのおかんに話を聞いたら、「あの時はね、家が潰れちゃって、家に入れなくて、神社に蚊帳を吊ったんだよ。星がきれいやったんやー」とか言ってくれたので、それを使おうと思いました。他にもハナコの父親が死ぬ場面は、あれは僕の妻の親が職業軍人さんだったんですけど、戦後に公職追放で仕事がなくなっちゃって、農業やりながらだったんですけど、酒を飲み始めて、寝タバコで家が燃えてしまったというのは実話なんです。あんまり実話と言うと実家から怒られるんですけど（笑）
ほんとの話ではあります。

——放映されなかった「ハナコ」の裏で起きていたこと

須貝 「明日のハナコ」がケーブルテレビで放映されなかった時に、実際に出演していた子たちは、もちろん残念な気持ちなどあったことと思いますが、実際にはどんなことが起きていたんですか？

玉村 その時には僕は退職していて、部活動指導員という立場だったんです。そして当時の大会がコロナで、無観客上演だったんですね。客席に誰もいない、親も観に来れない、誰もいない、審査員だけが3人いるという舞台だったんです。

須貝 演劇部の他の学校の子たちも観られないという状況ですか？

玉村　そうです、演じた子たちも上演したらすぐ帰るという状況で、ホールにいられなかったんです。子どもたちも他校の上演を観られなかったんです。あの当時は、コロナで大会すらできない県もありましたけど、福井県は上演はできたんですけど、その劇を審査員の3人しか観られなかったんです。その代わりに、福井県はいいところで、全部録画して年末にケーブルテレビで全部放送してくれるという約束があったので、よかったとは思っていたんです。ですが、大会が終わった次の日くらいに電話がかかって来て、問題があって揉めている、と。どうしたの？と訊いたら、うちの学校だけ放映できないかもしれないと話があって。それで一旦顧問の先生の会議でもうダメと決まりかかったんです。その時僕は顧問じゃなかったんで、顧問会議に出られなかったんです。でもある顧問の先生が「生徒の気持ちを聞いたらどうや？」って話をしてくれまして。そこで僕が立ち会って子どもらに「実はこういう話になってるんだよ。原発のことも書いてるし、北野武の名前が出てるし、差別用語もあるみたいだし、クレームがついてるんだよ」と説明したら、やっぱり子どもたちは泣いていましたね。ちなみに、主演のハナコを演じた女の子は、審査員から演技賞をもらっているんですよ。でもその子は「わたし演技賞もらったけど、ちょっと嬉しくない」と号泣していました。それをうちの高校の顧問の先生にお願いして、顧問会議にこの様子を伝えてくださいと言いました。でも結果的にダメという話になったんですけど、そこから僕は個人的に活動して訴えていくから、すまないけど、多分部活に迷惑がかかっちゃうと思うから、指導員は降りるから、君らは顧問と君らでがんばってくれと伝えて降りたんですよ。今思えばその判断はミスったかとは思いましたが、その後色々な活動をしました。結果的には決定が覆ることはなく、現在に至っています。ちなみにお客さんのお手元に「明日のハナコ年代記」というのがあると思うんですけど、大体ほんとはのでぜひ読んでください。

(トークが行われた当日、客席には玉村先生が用意してくださった「明日のハナコ年代記」という資料が配布されていました)

——顧問会議で語られた内容と黒塗りの理由

須貝　さきほど楽屋で聞いて衝撃だったんですけど、先方からの返答を見せてもらってもよろしいでしょうか。

玉村　「明日のハナコ年代記」も結局は僕の中から見た経緯を書いたものなんで、本当のところはどうだったんだろう？というのを顧問の先生方の会議でどんなことがあったんですか、と教えてもらえませんか？と言ってみたら、情報公開制度というのがありまして、会議の様子を公開してくれただですよ。

(ほとんどの箇所が黒塗りされて、内容が掴めない資料が客席に提示される)

森田 ……真っ黒ですね。

須貝 みなさん見えますかね？真っ黒で、ちゃんと読めるところが、名前くらいしかないですよ。これは「明日のハナコ」上演委員会のホームページでも見られる情報ですよ。

玉村 これは県の文書なんで、誰が見ても問題はないものです。

森田 そりゃそんだけ黒く塗ってあったら。

須貝 これで公開されなかったら意味がわからないですよ。もう笑ってしまうくらい真っ黒ですね、本当にびっくりしました。

玉村 ですので、結局最後まで、どうして？なぜ？という理由がわからないままなんです。原発に関しても、嘘は言ってませんから。放射性廃棄物はどうすんの？っていう話をしてるだけです。差別用語に関しては確かに、うん…どうなのかなって思うところはあるんですけど、あれ言ったのは敦賀市長なんです。それはツツウにどの本にも書いてありますし。その市長さんの言葉を劇にしたものもあるんですよ。だけど、ちょうどその時に敦賀市長さんの息子さんって人が、自民党の議員で、いい位置にいたんですよ。でもその方は例の裏金事件で失脚していなくなってるんですけど（笑）多分きつと絶頂期だったんですね。あと、これはまたヘンな話なんですけど、北陸新幹線がありますでしょ。あれが悲願でとうとう通ることになったんですよ。北陸新幹線というのは東京から福井の敦賀まで一本で通ることになって嬉しいことなんですけど、その新幹線を通した当時の知事さんのインタビューにあったんですけど、「原発を引き受けるから新幹線お願い、って僕は言ったんだよ」ってNHKのニュースで言ってたんで、おーすげー！言った！と思ったんですけど。ちょうどその新幹線の工事の話とか、国会議員が偉かったっていうのもかぶっていて、そのあたりのことが、「今それをほじくるな」っていう話になったんじゃないかな？と思います。ただ、そのことはそんなに表立って言える理由ではないから、粗探しすれば「差別用語が一番のキーだね」とそこを突いてきたんじゃないかなあって、想像してはいるんですけどね。ほんとのところはなんぼ訊いても出てこないですよ。言ってくれれば嬉しいんですけど。

森田　　そうですね。言ってもらえればまだちょっと納得できるところもあるかもしれないですけど・・・

須貝　　言ってくれないなら、一方的に憶測や類推するしかないですよね。対話になっていないのが、なんというかちょっとなあ、というのはありますね。

森田　　悔しいところではありますね。

岩淵　　役者サイドからすると、こういった事件というか騒ぎがなかったら、僕はこの「明日のハナコ」に出会っていないので、本当になんとも言えない気持ちなんですけど。役者さんでこの作品のファンのひが多くて、小劇場を中心にあちこちでリーディング公演とかもされていますので、これからもその運動が続いていけばいいなと思うし、僕もそれに出ることができて本当によかったと思っています。

——イワントモリと「明日のハナコ」

須貝　　最後にもうひとつだけいいですか。玉村さんとも楽屋で話をしていたんですけど、イワントモリがどうしてこの作品をやろうとしたのかというのをお聞かせいただけますか？

森田　　これは僕からやりたいって岩淵さんに言ったんですけど、「明日のハナコ」上演委員会のホームページを見て、この経緯を全部見て、こういうことがあったんだ、とは思ったんですけど。ただ、やっぱりどうしても、演じた女子高生たちの話がなかなか出てこないというのがあって。その子たちが放映されなかった時の、想いとか、多分どうしたって自分にはわからないことだと思うんですけど。でもなんか、それを自分とか他の演劇人が広めていってっていうことは、大事なことかなと思って。やりたいと言いました。

須貝　　でも、なんていうか、今のその議員のことがあったとか、新幹線のことがあったとか、もし良かったらぜひ「明日のハナコ年代記」を読んでいただきたいです。僕も読ませていただいたんですけど、すごく大きなことに巻き込まれて、比較的小さいことが潰されてゆくような構図って間違っているなと思いますし、演劇の何が好きかって、小さい声を大きく増幅してゆくものであるという気持ちが僕の中にはあって。だから当時の女子高生たちはどういう気持ちでいたんだろうとか、この作品の中にもあったように、お金が生まれるからと言って、犠牲にされるひがいて。じゃあ大きい利益のほうを取っていいのか？っていうことは、疑問として投げかけ続けたいな

とすごく思うんです。だから僕もこの作品に出会えてとても良かったと思っています。

岩淵 ほんとに複雑です。だってこの作品をやらせてもらって、僕はそれで生計を立てていけなくちゃいけないじゃないですか。とても複雑な想いです。でもそれも役者の役割なのかなと思います。

——あの時の演劇部の子たちと演劇

玉村 じゃあ、少しだけそれに絡んだ話、かどうかわかんないですけど。上演した演劇部の子たちっていうのはもう卒業してるんです。そのうちの何人かは、演劇活動をやっています。僕がほんの身内でリーディングの劇団を作ったんですけど、その中にも実は来てくれています。つい昨日その本番があったんですけど、さっき出た演技賞取った子は観には来れなかったんですけど、「観に行きたいです」って言うてくれました。あ、その子は演劇部をいっぺんやめかかったんですけど、ちょうど僕が装置の柵を作っている時に、前を通りかかったものですから「ちよいちよいちよーい」って声を掛けたんです。

須貝 えーそこも実際にあったことなんですね！（笑）

玉村 掛け算の九九ができないのは僕のことなんですけど・・・
もう60なんぼやったんで、九九がわからなくなっちゃって（笑）

森田 そこも実話だったんですね（笑）

玉村 こんな事件がありましたけど、部員たちは卒業して、全員ではありませんが、何人かの子たちは、演劇を嫌いになってはいなかったんで、むしろ続けてくれているっていうのは、嬉しいなと思います。

須貝 それが聞きたかった。

森田 ほんとよかった。
今日はありがとうございます。

岩淵 ありがとうございました。

玉村 本当にありがとうございました。

会場、大きな拍手

玉村先生、貴重なお話を本当にありがとうございました。